５．学会企画研究「生活史の中の音楽と音楽教育」がスタートします

会長　権藤　敦子

ニュースレター第 96 号でお伝えしましたように，学会企画研究「生活史の中の音楽と音楽教育」が今年度よりスタートします。これは，社会的・歴史的背景をふまえた量的・質的な記録の蓄積，それに基づく研究を行い，人にとっての音楽・音楽教育の意味と位置付けを明らかにしようとするものです。これまで２年間にわたり常任理事会企画として取り組んできたプロジェクト研究をその萌芽とし，資料の保存・アーカイブ化ワーキング（2022-2023）によって道筋がつけられた本学会の調査データ保存事業を基盤として，全国各地の幅広い年代の会員の皆様に参加・交流していただき，学会が企画する研究として展開することになりました（図１参照）。

人々にとって音楽と音楽教育がどのような意味をもってきたのか，音楽の「教えと学び」が人々の生活や意識，価値観，生き方にどのように位置付いていたのか，社会の変化が音楽教育にどのような影響を与えてきたのか。現在に至る日本の音楽教育について，かつてない規模で迫れる限り実態に近づいて調査を行うとともに，一人一人が生きてきた文脈と，エビデンスとして示された事実を照らし合わせて検証していくという研究は，全国 1,500 名を超える学会員を擁する本学会でなければなしえない取組です。学校音楽教育について言えば，脆弱な存立基盤の上に立って時代や社会に翻弄されながらも約 150 年にわたって継続されてきましたが，今，学会としてこの研究に取り組むことは，未来に向けて音楽科の確かな方向性を見出す礎となる重要な事業にもなります。また，その時々の音楽教育に関わる状況を調査し，記録して蓄積し，倫理に基づく取組をふまえて，共有財産として公開し，研究を推進するとともに成果を公表することは，音楽教育の発展に資する上でも，会員の研究活動を推進していく上でも，そして，（当然のことながら）資料として学会のデータを使用したことを明記して各々の研究が展開されることにより，学会が社会の付託に広く応えることにもつながります。

研究は「質問紙調査部会」と「インタビュー調査部会」によって進められます。質問紙調査部会では，各地区担当理事を通じて夏以降に調査についてのお願いと実施を順次進める予定です。インタビュー調査部会では，ご意見・情報を 10 月から募り，2025 年度から拡大調査部会を組織して勉強会や各地でのインタビュー調査の実施，検討を行う予定です。皆様，ご参加よろしくお願いいたします。

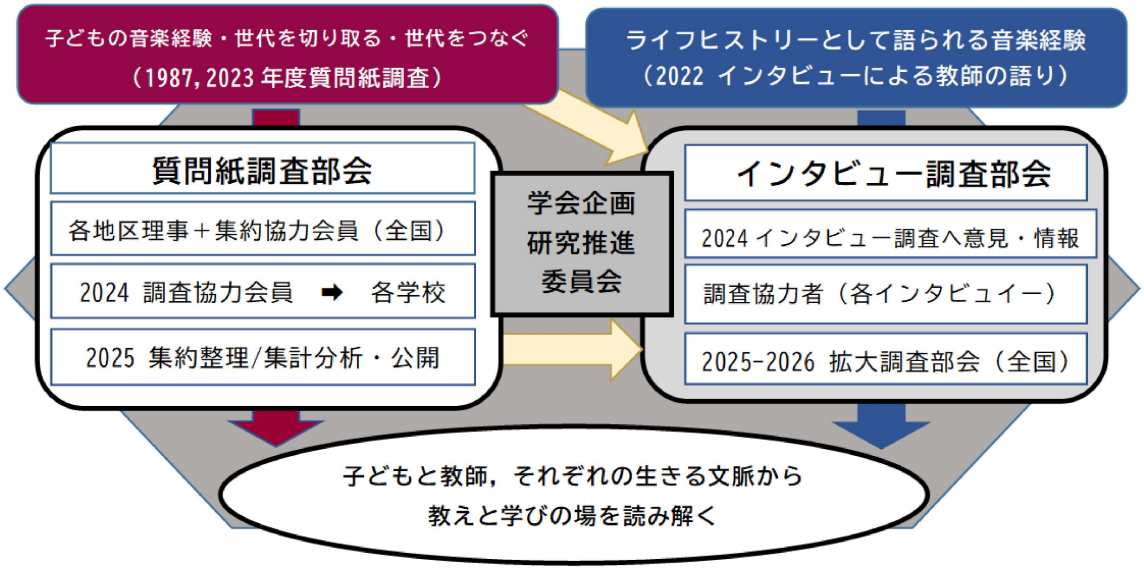

図１　実施の流れと研究組織の概要